

世界が静止する日【第一部？完】

ノイラーテム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗黒大陸の中に存在するメビウス湖。

人類社会はその中において繁栄していた。

だがその輝かしい平和の陰に潜み、世界征服を企む秘密結社BF団。

即ちビッグファイアの一団があった。

その卓越した念能力に対しハンター協会は阻止しようとし、そして……。

他にも対抗する一団が存在した。

目次

G R 計画編

黒いアタッシユケース	1
バシユタール号の惨劇	5
ステルス・ネットワイヤー作戦	12
盗賊たちの黄昏。勝利の歌声、未だ響かず	18
25 真実の世界へ向け、バシユタール号で明かされるG R計画！	
世界を導く北辰、全てはビッグファイアのために	32
大団円―満ち足りしは、幻の蜘蛛	40

GR計画編

黒いアタッシユケース

●盗賊たちのラブソディ

薄暗い雨の中、オンボロなビルの一室で男が瀟洒な小箱を開けた。乾いた音を立てて小箱はリズムを奏で始めるが、生憎と外は雷雨。ガラガラと雷が唸り声をあげるのだが、周囲にいる聴衆は最初から音楽など気にもかけない。

いや、その混濁こそが良いのだと男は思ったのかもしれない。

もし尋ねられたならば、今日のプライベート・コンサートは雷鳴によつて完成するのだと口にしただろう。

「団長。そんなに気に入ったなら取っておけばいいのに」

「いつも言ってるだろ？ 手放すのが惜しいくらいが売り時だよ」

大事にしまつていても失われる時には失われてしまう。

だからオレ達にはこちらの方が大事なのだと、壁に描かれた薄汚い落書きこそを団長と呼ばれた男は愛おしく思った。

コンクリートの落書きはやりたいで一杯だ。

仲間たちが暇を持って余して描いた他愛ない我儘。それはきつと靴や金庫の中の何よりも大切な事だろう。

「それに欲しく成つたらまた盗つて来ればいいさ」

「それもそうだね」

このやりとりが一同を端的に表していた。

何よりも、『盗つて来る』というありようが彼らの本分だ。盗賊団であり、刹那的な愉しみの為に……。

いいや、違うか。

彼らは別に刹那的でも、厭世的でも、世間が言うようにサイコパスでもなんでもない。ただ流星街出身の彼らは、自分たちの命が明日もあるとか、社会的なモラルや約束事が大切だとは欠片も信じてないだけだ。

例え長年の友人との約束でも、必要ならば平然と破る程度に。

「これを含めて幾つかの『種銭』を用意した。一番面白い物を持ってきたチームの勝ちだ」

「高額とかじゃなくて面白い?」

男は小箱を頑丈なアタッシユケースに入れる。

そして似たようなアタッシユケースの上に置いて仲間たちの方へ話を振った。

「新しく補充した仲間を含めて、お互いがどんな風に考えてどんな行動を採るかを見るだけだからな。別に利益が出る必要もないし、できるなら大儲けしてくれても構わない」

「おーけー。楽しければそれでいいってことだな」

「かといって、ツマラナイ物もて来たらコロスよ」

団長と呼ばれた男の説明に、今まで口を挟まなかった聴衆が笑った。

稲光にチラリと顔が映り、見慣れぬターバン姿や盗賊には似合わない黒いマスクが映る。

「で、どつちに付くよ?」

「コラコラ。新人の能力や相性を見るんだから、勝手に選ぶなよ。選ぶとしたらシズクやコルトピの方からだろ」

勝手にメンバーを振り分けようとしたターバンに、最初に口を挟んだ青年が抗議を入れた。

「関係ないね。その時つるんでるメンツで仕事する。それが流儀」

「違げーねえ。そっちの二人が嫌だっつてんなら、コインで決めても良いぜ」

マスクとターバンは青年の抗議に耳も傾けず、ニヤリと笑って話に出た新人の方を眺めた。

彼らからみれば新人研修じみた事件^{やま}を熟さずとも、こういったやりとりの応酬でも良いのだ。どうせ役に立たねば死ぬだけである。

「あ、私どつちでもいいです。面倒くさいんで」

「……同じく」

話を振られた新人たち……シズクとコルトピはもめ事をスルーした。

団員同士のもめ事はご法度だからではなく、ともに自己主張や序列などというものはどうでも良いと思う性質たちだったからだ。

これにはターバン達も苦笑い。

肝が太いのだけ無関心なだけか知らないが、二人の思考パターンはまだ見えない。これで面倒な新人研修に出掛けるのは決まりだろう。

「じゃあオレはシズクでフェイタンがコルトピな。他のメンツも同じようにいま立ってる場所で分れりゃいいだろ」

「勝手に決めるとコロスよ」

ターバンの言葉にフェイタンと呼ばれたマスクは不満を口にしつつも……。

「こだわりなど最初からないのだろう。その場に居た数名と同じく、メンバー別けに同意した。」

「つてことはオレもフランクリンもコルトピ側？ 本当に大丈夫かなあ」

「あいつらが良いならそれで構わないだろう。潜入に失敗したらしたらで、面白い物が見れるさ」

「どうやらシズク側には脳筋が中心で、コルトピ側に頭脳労働派が揃っているらしい。」

シズクに期待するしかない状況だが、盗んで来る予定の物まで吹き飛んでしまわないか今から不安である。

「それでシャル。今回は何処に潜り込むんだ？ こんな御大層なケースまで用意して」

「寝台列車を会場に行われるトレード会だよ。一定ランク以上のグッズを出品してさ……」

フランクリンと呼ばれた大男の質問に、シャル……シャルナークという青年はパンフレットを取り出して説明を始めた。

パンフレットには今話題の豪華寝台列車バシユタール号が描かれており、ちよつとした観光も愉しめそうだった。もしかしたら、シャルナークも新人研修なんかする気はなくて、自分が楽しむためにこのコースを選んだのかもしれない。

ここに幻影旅団が動き出したのである。

●次回予告『バシユタール号の惨劇』

豪華寝台列車に幻影旅団が乗り込んでいく。

まだ若い彼らがそこで出逢ったのは、世界征服を企む悪の秘密結社
BF団。

盗みを働こうとする幻影旅団の前に立ち塞がるのは、十傑衆の一
人。

『手伝ってやろうか？ ただし……真つ二つだぞ？』

バシユタール号の惨劇

●移動するトレード会場

寝台列車は道と部屋に区切られているが、会場であるラウンジカーは幅広い。

そこに金持ちが持ち込んだ品の一部が展示されている。

「どしてこれを狙たらいけないか。コルトピ居れば問題ないね。それとも偽物か？」

「本物ではあるんだけど……ここにあるのはサンプルだよ。気に成つたら、それぞれの客室に交渉に行くんだ」

フエイタンの質問にシャルナークが答えたが、展示品はあくまで参考例なのだという。

そして一同は自分たちが持ち込んだ品の前に訪れた。

そこには抉り出された目玉が浮かんでいる。

保存用薬液の色合いに負けない、鮮やかな緋色の色彩が随分と印象的だ。

「オレたちの場合だと緋の目を置いて、サイレンのオルゴールとかは手持ちで押さえてるだろう？」

「なるほどな。ここに来ればそれぞれが持ち込んだブツの傾向が判る。展示品より優れているかは駆け引きつてやつだ」

出かける前に聴いていた小箱はオルゴールだったらしい。

それにしては音の質が違っていたような気がするが……フランクリンにとつてはどうでも良い話だ。三品ほど持ち込んでいるのだが、残る一つが生態。パーツなので、誰かの声帯でも使った人間オルゴールなのだろうと思うことにした。

この交換会は同好の士を探し、好みの品を融通し合う会場なのだ。

コレクション自慢に訪れた者もいるかもしれないが、多くは展示品と類似の傾向の品を持ち込んでいる。

「見せ金に持ち込める品がねえと、交換を理由に潜入することも不可能なことだな」

「それで『種銭』ね。盗賊が金払うおかしい思たよ」

一同は持ち込まれている品を丹念に見て回る。

美術品などに興味はないが、命題である『面白い物』であるとか、単純に高価な品がないか。そして……誰の客車に押し入れれば、良い品が手に入るかを物色し始めた。

「面倒ね。やっぱりこの品全部持て行くか？」

「それはダメでしょ。きつとシズクたちは、こいつを持っていくつもりだろうからさ」

短絡を起こしたフェイタンをシャルナークが慌てて止める。

盗みで勝負している相手チームの目論見に、どうやら見当がついているらしい。興味がそそられたのか、それとも最初から行動する気はなかったのかフェイタンは続きを促した。

「こいつてどれ？」

「こいつだよ、足元のこ・い・つ」

笑って爪先を動かすと床はコツコツと軽快な音を立てる。

どうやるのかはともかくとして、シズク班は寝台列車そのものを強奪する気らしい。なんとも豪快な強盗である。

「シズクの能力は無生物の収納なんだ。どれだけ収められるか試してみたくない？」

「なら頭から試して、入らなくなったらどこかでチョン切るつもりだろうな。このラウンジは前側だ。無理に奪い合う必要もないだろう」

列車強奪など大事であるが、実に楽しそうに語る。

シャルナークもフランクリンも頭脳派だが、生え抜きの旅団メンバーである。盗むことに異論があるはずはない。荒事に忌避観などなく、スマートにいけばラッキーくらいにしか思っていないかった。「場所ごと持て行く。盗賊の鑑ね。ところで私たち何持て行くか？ 負けるの性に合わないよ」

「表か裏の勝負で連中は表を選んだ。なら、俺たちは裏で良いんじゃないか？ 無慈悲な盗賊団に狙われた金持ちが、真っ先に持って逃げる奴だ」

フェイタンとしては負けたと言われることが腹が立つらしい。

そんな彼にフランクリンはのんびりと、自分たちの事を無慈悲だと

口にした。何しろ逃げる相手から盗んでしまおうというのだ。これが無慈悲でない筈がないだろう。

「陽動を向こうがやってくれるならこっちも楽になるね。勝負にこだわるなら、二番・三番の品をコルトピの力でコピーして入れ替えれば最高だけど……期限は？」

「二日。良くも悪くもそれは変わらない」

これまで会話に加わっていないなかったコルトピが質問に答える。

彼の能力である神の左手悪魔の右手はとても有益で便利な能力だ。当然ながら、多岐に渡る制限が存在した。

今回問題になるのは、具現化する期間は一日だから、トレードの際に嘘をついて偽物を掴ませるタイミングが難しい。渡した相手がしやべらずとも、一度にたくさんの人間と交渉を続けたら嘘くさいだろう。

「俺たちは盗賊団であって詐欺師じゃないからな。探知目的で良いだろう」

「それなら暫くは物色だけで済ませて、本命は『最終日』だね」

コルトピが製作したものは、念の探知技術である円の役割を持つらしい。

詳細までは聞いていないが、円として機能するというだけで使い方を作戦に組み込むことができる。面白い物なり、大量に手に入れたコレクターを追いかけるために利用する算段だ。

行動タイミングは、お客が追加される数が最大の町を過ぎてから。シズクに付いたメンバーは乗車していないので、向こうの性格を考えたら獲物が増えた直後であると思われる。その日が作戦決行日という訳である。

●襲撃

一同は他のお客と無駄話をしながらノンビリしていたわけではない。

自分からトレードを持ちかけたり、断ったりする間に、誰がどんな宝物を持っているか。護衛はどの程度の能力かを測っていたのだ。

そして予定通り大勢の客が乗り込んだ時……。

取引に応じると称して、幾つかの『仕込み』を行った。

「それではミスター陳。良いお話をありがとうございます。可能な限りの良い旅を」

「こちらこそミスターシャルナーク。これで旦那様に面目を施せませす。できうる限りの良い旅を」

お互いに黒いアタツシケースを渡してトレードし合う。

陳という男はターバンにサングラスという風情で、どこかの執事という触れ込みだが念能力者だろう。能力者はそれなりの数が居たが、緊張感を伴うのは陳を始めとした数人だけだった。

退席した後は油断なく仲間たちの元に合流し、ケースを開けて中身が本物かどうかを確かめる。

「どう？」

「本物」

アタツシケースに入っていた本にコルトピが無造作に触れ、その場で偽物を作り出した。

否、その場でしか偽物を作り出せず、その期間は僅か一日、しかも念能力で作られたものはコピーできないという性質を持つ。だが、ここではコピーを見破る方法に使えるのでありがたい。

丁寧に作られた偽物かもしれないが、今回は団長への土産なので気にはしていない。

自分達を騙し通すほどの本ならば、それなりの土産にはなるだろう（自分たちは愉快ではないが）。

「偽物はどうなってる？」

「あっちの客車から動いていないよ」

「疑っていないか、頼まれ物だから最初から興味ないだけの可能性もあるが、まあ予定通りだ」

幾つもの条件が苦にならぬほどコルトピの複写能力は破格だった。見分けがつかぬほどの精巧さを誇り、円の役目を兼ねているので相手の位置が特定できる。この様子ならば安心できるだろう。

「何を恐れてるか。偽物ごと他のお宝回収すればいいね」

「余計なリスクを背負うことなくない？ みんな居ないのに無理する

ことはないだろ」

ストレートに行きたいフエイタンに対し、スマートに行きたいシャルナークとでは土台の意見に差があった。

フエイタンとしては出合う者はみな殺し、宝物はみな奪うほうが楽でいい。幾ら考えても同じことは良くあるからだ。

シャルナークとしては、来ていない者も含めて戦闘向きのメンバーが分散した状況で無理に戦う必要は見い出せない。

「俺はどっちでもいいぞ、団長は誰の指示に従えとか言っていないしな」
「並行線か。じゃあコインで……」

フランクリンが仲裁を投げたことで、いよいよ話し合いは決裂する。

団員同士の争いはご法度なので、コイントスで決めようとした時。大きな変化が一同……いや列車を襲った。

「時間切れね。出会たらコロスよ」

「あーもう！ いきなりかよ」

ビリビリとした振動の後、列車が不規則に揺れ始める。

こちらに居ないメンバーが既に襲撃をしたと知って、フエイタンがやりと笑って飛び出した。ここに至っては説得する時間も必要もない。シャルナークたちも行動を開始した。

だけれども、事態は一回の想像を超えていたのだ！

あえていうならば、列車ごとお宝を奪おうとする盗賊団だからこそ、抜け落ちていた考えだというべきか。

「あ……」。短気で堪え性がないとか思っごめん。別口が居たんだね」

「てめえが普段どう思ってるかよくわかったよつ。見ての通り取り込み中だ」

外に出て暫くすると、列車の一部が破壊されていた。

そこでは奇妙な大男……まったく同じ顔が数人ほど暴れている。

「双子とか三つ子ってわけじゃないよねえ。念獣かな」

「どっちでも構わねえよ。近づけねえのが問題だったが、フランクリンが居るなら問題ねえ」

仲間たちがソレと相対していたが、遠慮なく降り回される鉄球にヘキヘキとしていた。

相手は体格的というか脅力的に、列車の屋根であっても微動だにせず、こちらは迂闊に飛ぶと列車から振り落とされかねない。とはいえ列車の中から迎撃に徹していると不利なままだろう。

大男が念で作りに出された念獣なのか、操られて異常強化されているだけか。

どちらなのかで対処は変わるのだが、操作系であるシャルナークにとってすることは一つだ。

「相性悪いしそいつらの相手お願いするね。オレは前の車両に行くから」

「あ、つてめえ！ 抜け駆けする気か！」

操作系はハマると一撃で戦況を決める癖の強い能力系統だ。

だがしかし、同じ操作系に対しては『早い者勝ち』というルールがある。加えて念獣を操作できるタイプの能力ではないので、シャルナークが大男を無視するのは当然だった。

加えて言うならば現在は勝負の継続中である。

列車ごと盗むのは面白そうだが、共闘を頼まれても居ないのに、仲間だからという理由で協力する気にはなれない。むしろお宝をいただいてくる方がよほどスマートな盗賊と言うものであろう。

「さてと……。目的地に着いちやうと面倒だし、振り落とされるのを心配するのも面倒だよ。ここは動力車を切り離すとしますか」

展示室であるラウンジカーを越えて、そこから先の連結を解除すればよい。

それでシズク班の勝利は無くなるし、こちらは最低限の物を回収しているので問題ない。後は逃げだす金持ちからお宝をいただいでいけば楽勝だろう。

そう思って連結部に来たのだが見たこともない造りになっていて戸惑った。

当然ながら、自分が考えることは他人も考える物だ。とつくに対策済みで、手順も知らずに手動で何とかするのは難しそうだった。

「うえ〜面倒くさいなあ。爆弾処理でもさせる気かよ。これじゃ不本意だけどぶっ壊した方が早いじゃん」

ハンターサイトを検索すると類似の機構が表示された。

細部の違いはあれど参考になるはずだが、あまりに面倒過ぎてやる気にはなれない。加えて言うならば彼の能力は携帯を経由するので、画像を見ながら作業するのは緊急時の対応ができないことを意味する。

「いよつと！ オレじゃあ素のままだと全然歯が立たないや。ウヴオーでも居ればなあ」

拳にオーラを集めて殴ってみるが塗装が剥がれた程度である。

別の用事があって今回来なかった仲間に頼りたくなるのも仕方があるまい。

そんな時の事……。

「手伝ってやろうか？」

「へ？」

掛けられた声に思わず間抜けな声を出してしまった。

それだけタイムリーな言葉だったと言っても良い。とはいえ、一つだけ問題があったのだ。

「ただし、真つ二つだぞ？」

パチンと澄んだ音が鳴り響いたのはその時である……。

ステルス・ネットワイヤー作戦

● ステップ・シークエンス

パチンと澄んだ音が鳴り響いた。

するとどうだろう、閉め切っておいたはずの扉が自動ドアの様に開いていくではないか。

「あ、やべっ」

シャルナークが咄嗟にバックステップを掛けられたのは偶然に等しい。

否！ それは偶然などではなかった。その時は知る由はなかったが、ちゃんとした理由によるものである。

キン！ と音を立てて両断される扉。

さきほど念を込めた拳でもビクともしなかった連結部ごと、列車が切り裂かれていく。

「……いやいやいや。これはないでしょ」

不意に横殴りの風が吹き、自動ドアの次は自動車窓か。

そんな冗談すら考える余裕があったのは、シャルナークは同じような能力を良く知っているからだ。

旅団のメンバー同士でも念能力の詳細は教えないが、一緒に行動する時に困る程度のことは知らせ合っている。仲間の一人に、口にしたことを行う『発』を持つ居る男が居るのだ。能力の名前までは知らないが、シャルナークは勝手に『有言実行』と綽名を付けていた。

「ってか、念のコントローラーが現実離れしてるし。あいつらもここまでの出力だせるかなあ」

目の前の扉を切り裂くのは判るし、仲間の能力で説明できる。

だがそれ以上、具体的に言うとは列車の側面すら切り裂くのは異常だった。放出系だとは思いますが、同じタイプのフランクリンですらこれほどの威力が出せるだろうか？

「我々が先に目を付けた物を奪って行こうとは困った子だな。人の物を勝手に持って行ってはいけないとお母さんに習わなかったかな？」

「生憎とそんな上等なものはお目に掛かったことはないんだ」

現れたのは白スーツの伊達男だった。

髪を流したウルフヘアーに、負傷なのか何かの制約なのか、黒目の無い白眼が印象的である。

人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべて意味のない最後通牒を口にした。

「今ならば見逃がそう。早く立ち去りたまえ」

「さすがにそういう訳にもいかないなあ。もう少しくらい話に付き合ってよ」

先ほどから感じている殺気はまるで減っていない。

見逃す？ ありえない。無策で逃げ出したら背中から切り付けかねない。だいたい、男の背後は血だらけだ。この状況で運転手を殺すような奴が本気で見逃してくれるとは思えない。

それに、もう一つ理由があるのだ。

時間を稼げば仲間たちがお宝を奪っている可能性は高い。そして……。

「っ！」

「……。フエイタン」

会話中に仲間の一人が襲い掛かった。

切り裂かれた天井から侵入し、一足飛びに襲い掛かったのである。シャルナークはそのために、気を引き付けていたともいえるだろう。

「……誰ね。この白眼蟹」

「知りたいかね？」

逆風の中で飛び込んだせいか、運悪く刃が脇に外れるはずだった。

しかし男は必要もないのに刃の先をつまむと、ヒョイッと強引に腕を別方向へ逸らせる。フエイタンが舌打ちしているが、袖口かどこかに暗器でも仕込んでいたのだろう。

「BF団が十傑衆の一人。『素晴らしき』ヒイツツカラルド。そう呼ばれているよ」

男はやれるもならば刺してみろと言わんばかりに胸を逸らせる。

そして後ろ手に腕を組み、ニヤリと不遜な笑いを浮かべた。

「自分で自分を素晴らしい、言う。とても滑稽ね。そんなに自分良く見せたいか」

尊大無比な自己紹介に対するのは嘲笑だ。

フェイタンは剣を一回り短く構え直し、幅広の袖口でリーチを誤魔化しながら嘲笑う。飛び交うのは売り言葉に買い言葉である。

「これは忠告だがちゃんと聞いておいた方がいいな、お嬢ちゃん。私の存在自身が素晴らしい、そういう能力なんだよ」

「てめえ……ぶっ殺す！」

女扱いされた事に激高したのか、剣を振るおうとした腕が肘打ちで止められる。

お互いに肘と肘が合い打って、オーラが弾ける姿はとても絵になった。その姿はまさに余裕綽々で、能力を説明してやったというハンデもまた本当なのだろうか？

フェイタンは怒りのあまり、演技を忘れて本来の口調が漏れ出てしまう。

「シャルナーク。こいつの言ってることをちゃんと訳せ」

「はいはい。BF団つてのは世界征服を企む悪の組織で、十傑衆つてのはそこで一番強い連中」

悪党は数居れど、世界征服を企むなどと言う狂人は彼ら以外にはいない。

恐ろしいことに本気で実行しようとしているあたり、他の組織が付いていけないのも当然だろう。

「見分けは簡単。覆面なら雑魚で、顔を見せてるやつは強い奴。そして……十傑衆つてのは世界の外に行っても通用するレベルだったかな」

冗談のようでどこまでも本気。

だからこそシャルナークは呆れているし、フェイタンは沈黙したまままだ。

「その通り。例えば私のこの指先はね、世界最高なんだ」

「っ！ くそが！」

そしてヒイツツカラルドが指先を前に向けた時、フェイタンは恥も

外間もなく飛びのいていた。

パチン！

指先が弾かれ、フィンガースナップが鳴った瞬間。

それまでフェイタンの居た場所は両断されている。その一撃で天井の破れた車両は、完全に切り割かれて動力車と分断されてしまう！

「よし、怪我の功名！ これで時間が稼げ……てないか。逃げるよー！」
「っ!」

ホッと一息つく間もなく、シャルナークが腕をひつつかんで後方に逃げ出す。

フェイタンが離れて行く動力車を見ると……。前傾姿勢を保ったまま走って来る男の姿があった。

その上体は微動だにせず下半身の力だけで走って来る。

体術のレベルまで常識をかけ離れており、『今の二人』では勝機がまるで見えない相手だった。

「この程度で死ぬなよ。お嬢ちゃん達?」

「いつか、殺すころす、コロス!」

ヒイツルカラルドの右手が音を鳴らし、続いて左手が鳴る。

車両が切り刻まれ、続いて両手同時に鳴らすと、十文字に切り割かれた。何の冗談か四度目は、片方の腕を背中に回す曲芸のような撃ち方である。明らかかな手加減というべきか、これではフェイタンならずとも怒りを覚えよう。

「落ち着いてよ。あいつの言葉、たぶんワザとやってるから」

「はっ? どういうことだ!!」

シャルナークはボリボリと頭をかいた後、その指先を車両の後方へ向けた。

そこには他の仲間が穴から顔を出しており、ヒイツツカラルドに何かしらの攻撃をしたようだ。

「見ての通りフランクリンの狙撃に対する牽制。あいつの行動にはちゃんと意味があるんだよ。というか、あれも含めて能力じゃないかな」

「……なんの意味がある。言うか」

手加減ではなくこちらを援護する仲間への対策だった。

そう聞かされてフェイタンも少しだけ怒りを収める。トーンはまだまだだが、口調はなんとか元の調子を取り戻している。

「あいつ自身がヒントだって言ってたろ？ きつと能力を説明した方が強く成るタイプなんだよ。あのレベルの能力者がゴロゴロいるとは思えない。あいつクラスじゃないと歯が立たない外来種ってどんだけ強いのか？」

ヒイツカラルドは強過ぎる。

狙撃していた仲間を牽制しているという事は、たった一人で幻影旅団と戦う気なのだ。世界に強い奴はいるだろうが、十傑衆という事はBF団にはあのレベルが他にも居るらしい。

「フランクリン以上の放出系で、ノブナガ以上のコントロールで、ウヴォー並みのパワー。常識ありえない」

しかしこれほど強い人物が、都合よく何人も同じ組織に所属するだろうか？

それを考えればルールによって、劇的な強化を図っているという事だろう。

「……制約と誓約ね。頭では理解したよ」

「そつ。仮に今だけなら逃げ回ればいいし、狭いルールを運用してるなら、サイトを通して世界中にばらしてもいいね」

ヒイツカラルドが接近する間にも撃ち合いが行われている。

掌底やバックハンドで放たれる広範囲のショット・ウェーブなら、フランクリンの念弾も普通に通用している。だが、あの指先を弾く攻撃にはまるで通用せずに押し負けていた。

ここで問題なのは、フランクリンは能力者の限界枠に差し掛かっているという事だ。

人が鍛え上げられるレベルというのは基本的に『幅』が決まっており、屈強の念使いはその幅を飛び越えるための努力をしていると言ってもいい。

人間の限界まで来ているフランクリンをアツサリ退けるといふことは、テクニクなり覚悟で幅を飛び越えたという事だ。

この相手は恐るべき、そして忌まわしい敵であると同時に……。

「ははは。あの能力を奪てやるか。それも面白いね。盗賊の戦い方、らしいといえばらしいよ」

ワザとらしい笑いは、怒りを鎮める為だろう。

その事が理解できるので、下手に茶化さないでおいた。

そして動力車を切り離された車両は、いつまでも移動し続けはしない。

動きが止まると同時に、奴がそのうちやって来る。どう戦うか今の内に考えておくべきだろう。

「つと。返事が来た。あいつ一人でオレ達を相手にするって言うなら……良いじゃない。全員を相手にしてもらおうよ」

「連絡入れてたか。何処で戦うか？」

シャルナークはフエイタンの質問に、周囲の地形で大きなカーブになった場所を指さした。

そこは断崖絶壁。一見戦うには不利だが、幻影旅団は戦闘集団ではなく盗賊団である。時に盗み、時に騙し合うのが本文であろう。

「あいつの能力はだいたい想像ついているんだ。ステルス・ネットワイヤー作戦開始だよっ」

果てして、その作戦とはいかに!?

迫るは最強十傑衆、迎え撃つは表裏比興の幻影旅団。

戦いの趨勢はいまだ見えないでいた……。

●次回予告『盗賊たちの黄昏。勝利の歌声、未だ響かず』

無残に切り裂かれた豪華寝台列車バスケット号。

そこに秘められたお宝を奪うために、幻影旅団とBF団の決戦が始まる。

罠を張り巡らせて逆襲に出る旅団メンバー。人界屈指の力を持つはずの彼らを、圧倒的な力で蹂躪する十傑衆。勝利の天秤はどちらに傾くとも知れなかった。

「今日は特別だね。もう一人来ているんだ」

盗賊たちの黄昏。勝利の歌声、未だ響かず

●ダンス・マカブル

背後から撃ち込んだはずの念弾へ、振り向きざまにバックハンドで扇あおがれた。

ただそれだけで衝撃波の壁が発生し念弾を叩き落とされたが、問題なのはそこからである。

容易く相殺されたことに舌打ちし、牽制を続行するためにもう一発。

だがピツピツと甲高い音がした瞬間、こちらの第二射を切り裂いて真空波が飛来する！

「フランクリン！」

「問題ねえ。てめえも自分の持ち場を守ってろ」

フランクリンは大きな手で顔を抑え、傷口周辺を念で焼き止血に変えた。

チャージをイメージして撃つてはいないが、連射タイプの攻撃で切り裂かれた事実はあまりにもショッキング。隔絶した念能力の差にむしろ笑いしか出てこない。

「さて。どうしたもんかね。暫く時間を稼げとは言われちやいるが……」

自分たちが蹂躪されているというのにフランクリンは笑った。

威力の天井と言うか……壁にぶちあたって以来、自分はどこか覚めた目で見ていた。これが放出系の限界だと。

若くして放出系を極めたと言われたこともあるが、まるで楽しくなかった。

自分は普通車が精々だが、強化系の仲間は馬鹿げた威力で装甲車も一撃でスクラップ。それなのに誇れるものか。今だって自分を切り裂いた真空波を、正面で相対しているチョンマゲ頭が簡単に迎撃しているのが見えるじゃないか。

だが、逆に言えばそこまで能力を絞った強化系に対し、同じ放出系のあの男は互角の威力を叩き出しているとも言える。

同じことが自分にできないと何故言えるのか？ 幻影旅団を蹂躪する相手だ、互角に戦うどころか、テクニックを奪えばさぞ爽快に違っているまい。そう思つて昔の様に獰猛に笑う。

「ほう。器用だね。何発耐えられるかな？」

「何発でも叩きおとしてやるよ！ 能書きはいいから掛かつて来いってんだ！」

踊るようなステップで放たれる強烈な真空波。

それを刀が迎撃し、背中越しに放たれた判り難い一撃も無造作に切り捨てる。『口にした事しか実行できない』が、『口にしたことだけは確実に実行できる』能力だからだ。

最初は『どうしてモロバレな能力にしたんだ？』とほぼタイマン専用の能力に首を傾げた。

しかし今だからこそ判る。このチョンマゲ頭は自分と同じような壁にぶちあたつて、状況を限定することでアッサリ克服したのだ。旅団に強化系は何人が居るが、『判っている事態』に対して、ここまでの対応力を持つ男は他に居ない。

「なにやってるんだか。こつちからも行くぞ。構えな！」

「ハハハ。やってみたえ」

まともによつて勝てないので連射をイメージして指を鉄砲の様に構える。

こうやつた方がコントロールし易いと思つたからだが、まだ何か足りない気がする。特にこの男を前にしてから特にそうだ。

軽やかなステップを刻んでパチン。

二歩目は空中で僅かに足を留め、そこから踏み出すようにまた一步。大胆にも背中を見せてパチンパチン。踊るようなリズムに合わせて指を弾く音が聞こえ……。フランクリンの体には無数の斬撃が刻まれた。

「つたく。こいつを足止めしろとか、シャルのやつ無茶言ってくれるぜ」

敵は正面組を相手にしつつ、牽制しているはずのこちらをズタボロに変えた。

だが切り刻まれながらフランクリンは手応えを感じる。この傷は経験値なんだと思えば、へでもない。

ヒイツツカラルドは強過ぎる。

同じ放出系のフランクリンが威力の天井にぶちあたっているのに、だ。そのことがフランクリンに能力の正体を教えてくれていた。

バックハンドや掌で仰ぐ範囲攻撃だと、こちらと同じ威力。

余裕こそ見えるがソレは攻め手であり『補助能力』の結果なのだとしたら、威力の天井はこの男にも言えるのではないだろうか？ つまりあのフィンガースナップだけが特別なのだ。

「あと少し、あと少し時間を稼げば洗いざらい持っていける。踏ん張れよ！」

「まあ無理だがね？」

仲間の攻撃に合わせ、足元に集中的に打ち込むことで態勢を崩す。

それに対して男はスッと足を留め、優美な動きで腕を持ちあげた。

そしてフランクリンを見下した目で嘲笑うのが見えた。

パチン！

澄んだ音が聞こえた瞬間、ただそれだけでフランクリンの人差し指が半ばから切り落とされたのだ。これでもう、指鉄砲のポーズでコントロールするのは難しいだろう。

「覚悟。覚悟の差か……判つちや居たんだよ。……なあクロロ」

フランクリンはこの場に居ない男の事を思い出していた。

寝台列車ごと盗むと聞いて面白がり、今頃はこちらに向かっているらしい。だが、思い出されるのはかつての日々である。

気楽に生きていたはずのあの青年は、ある日から突如として豹変した。相手の能力を奪うという、恐るべき念能力を備え幻影旅団を結成する。

今思えば、旅団を作つてナニカしろと命令……いや使命のような物を流星街の長老たちから託されたのではないだろうか？

流星街には他にも旅団が存在したが、どうして結成されるのか？

そしてその役目が何かは良く判っていない。

『人は犠牲なしには幸せになれないのか？』

ある時、団長はとある本の言葉からそう引用していた。

あの時、なんとなくそうじゃねえかと流星街の現状を見て思っただけだ。ゴミ以外に何も無い町で生き残るには犠牲無くして生き残れないだろう。

だが今ならば何となく判る気がする。

旅団とはその長を鍛えるための犠牲として、コミュニティそのものを人質に取ったのではないだろうか？　そして旅団の長……場合によつては入れ替わった団長たちの間で次代の長老が決められる。

迂闊な事をすれば旅団……友人たちごと皆殺しにされるとあつては奮起せざるを得まい。

それだけではない、他の旅団と殺し合えと注文されたらどうだろうか？　そいつらが友人ではないとどうして言えるだろうか？　その決定を覆すには勝つ以上に強大な力が必要なのである。

自分の命を、トモの命を、町の命を救うには犠牲無くしては進めないかもしれない。

だが欲しいモノがトモであるならば、その犠牲が出る状況を乗り越えなければならぬのだ。その覚悟こそがクロ口をして、あの能力に目覚めさせたのだろう。思えば長老の爆破能力も、命を資源化することで有効だと思わせる能力じゃないか。

「ああ。判っちゃいたんだ。勝手に天井を作ってるのは自分だと。限界を作ってもう何もしなくていいと言い訳を作っているのは自分だつてな！」

止血の為に握り締めた指を、ことさらに握り締めてフランクリンは吠える！

否！　必要以上に力を込めて引きちぎったのだ！！

「そんな自分に腹が立つ！」

力を籠め過ぎて、興奮し過ぎて血が溢れ出る。

筋肉が締まって血を止めるが、そんなことも忘れるくらいに力と決意が溢れて来た。

「おい。やめとけて。後で縫ってもらえば……」

「いいんだよ。いや、これがいいんだよ！　きつと、この方がいいに違

いねえ！」

フランクリンは仲間の言葉も無視して先の千切れた指を敵に向ける。

そして血が漏れるのも気にせず、オーラをそこに充填した。千切れた指先を銃口に見立ててこれまで以上のオーラを注ぎ込む！

「足りねえぞ！ 俺を倒したかったら三倍盛ってこい！」

「ク……フハハハ。何とも素敵な強がりだ。もう少し遊んであげよう」

最初に出た強烈な一発は、指を千切った覚悟への祝砲だろうか。

それだけならばマグレという事もあるが、続けて放たれる念弾は明らかに今まで以上の威力だ。皮肉にもヒイツツカラルドが回避を始めたことでそれが証明された。

明らかに自分に匹敵する威力を出されたことに驚きもせず、むしろ口笛さえ吹きながらヒイツツカラルドは踊り始める。怒涛のごとく放たれる念弾と真空波が、相殺どころか周囲を消し飛ばしながら銃撃戦を始めてしまった。

「あーもう無茶ばかりするんだから！ 時間稼げって言ったけど、無茶し過ぎ！ コルトピ！ 第一段階発動だよ！」

「もうやってる」

ここで行われるのは目眩しました。

流れ弾どころか余波を浴び、ラウジンジカーがグラリと軋む。それだけでなく先ほども念獣の大男が暴れていたのだ、長くは保つまい。

念弾で守り切れず、車両の天井が真つ二つになった時。シャルナーの指示で無数のアタツシケースが出現。本物も偽物も周囲にバラまいておいた。今となっては御目当てはこんなものではない。

「あんたらもお宝が欲しくてやって来たんだろ？」

「ん？ 荷物をばらまいたにしては多いね。……なかなか佳い悪足掻きだ」

シャルナークとしてはお宝を守りつつ自分達への手立てを邪魔する。

そんな作戦……だと思わせておいた。本命は別に居るが、今は時間を稼ぎながら『凝』を誤魔化す材料に成ればいい。

そんな中で、ヒイツツカラルドは暫し動きを止めた。そして片手を挙げるポーズを見せる。

「まさか休戦つてわけじゃないよね？ それとも十傑衆ともあろうものが怖気づいた？」

「いやいや。役立たずの念獣バランを下げるように伝えただけさ」
話がつながらない。

自分が戦闘を止め、念獣の大男も下げるという事は自然と休戦にならないのだろうか？

それともこちらと同じように時間稼ぎを？

そう思った時、ヒイツツカラルドがサディステイックな笑みを浮かべるのが見えた。

「十傑衆と言えよ……今日は特別だね。実はもう一人来ているんだ」
「っ!？」

ヒイツツカラルドただ一人で旅団の半数を圧倒している。

それなのに、まだ居るといえるのか!？」

その答えは彼方から伸びてくる長い鞭。

そして無数のアタツシユケースの中から、一つを奪い去る巧みな鞭捌きである。

「残念ですねエシャルナークさん。私は君が割と好きだったので
が」

「まさか陳さん!？」 コルトピ、あれは?」

「……駄目。持っていかれた」

それを実行したのは交渉していた陳というターバンの男だった。

鞆を開けた時に見えたのはよりにも寄って本物の緋の目。どうやって見破つたと言うのだろうか？

「ある時はオイルダラー。ある時は万能執事ミスター陳。その正体はBF団十傑衆が一人、“眩惑”あるいは“幻惑”のセルバンテスと申します」

ここに来て二人目の十傑衆が現れるという衝撃の展開。

戦いはいまだ途中、双方の思惑が秘かに進行しているのであった。

●次回予告『真実の世界へ向け、バシユタール号で明かされるGR計画！』

現れた二人目の十傑衆。

その眼力は無数のダミーをもものともせず、容易く緋の眼を奪い去った。

では以前に渡した偽物も見抜かれているのか？ そして怨念渦巻く品を次々に奪い去ろうとする、その目的とはいかに!?

真実の世界へ向け、バシユタール号で明かされるGR
計画！

●向かうべきベクトルと、存在強度

沈み始めた太陽の代わりに緋の眼が燦然と輝いている。

アタツシユケースから取り出されたソレは、いまや復讐者となって
旅団はんにんを見つめているかのようだ。

「素晴らしい。この威容、この澄んだ殺意。もしや貴方がたが手づか
ら収穫されたのですかな？」

(……殺意だって?)

その言葉にシャルナークは違和感を求めた。

いかにも蒐集家が美術品を愛好しているような姿だが、とてもそう
は見えない。言葉でそう言っているだけでなく……まるで武装を値
踏みしているような気がするのだ。それこそフエイタンが銃のバレ
ルや残弾を確認するかのよう。

(どうやってこれだけのコピーの中から見つけ出した？ オーラで？

コピーもまた念だ)

ただの美術品とならばオーラで区別できる。

団長が言っていたような気もするが、素晴らしい作品や料理には
オーラが籠り『格』が違うのだという。

だから凝でお宝を見分けてみることも偶にやるのだが、それだって
コルトピがコピーした際にオーラだらけのはずだ。本命の作戦実行
に当たってオーラを隠し易くするため、コピーだらけにしたのだか
ら。

(でも殺意？ 品に籠った殺気と言うならアレは確かに相応しい。あ
いつらなら死後の念にでも成り……死後の念?)

セルバンテスが言うように殺害犯は旅団なのだが、その時のことを
色々と思いついていた。

目を赤く輝かせると強く成り、しかも死んですらこちらを睨み続け
るあの眼。彼らが念能力者に近い存在であれば、思い当たるフシが存

在したのだ。

「死後強まる念……ね。呪いでも掛ける気かな」

「素晴らしい！ 半分ほどではありませんが正解です。だから私は君が好きなのですよ」

この連中は秘密結社ではない。

顔を晒すことが一流の条件であり、能力を知られても問題ない程の腕前が精鋭の条件。ならば独特の制約と誓約でもあるのかもしれないと、あえて聞いてみた。

知られることが、説明することが条件の一部ではないか？

言われてみれば知られても問題ない程の強さで蹂躪すればよいのだから、知られて困ることなどないのだろう。だとすればあえて聞くことで説明してくれるのではないだろうか？

自分達はスタコラ逃げるつもりなので強化されても構うまい。ゆえにシャルナークは無責任に聞いてみた。

「先ほどの念獣はバランスと申すのですが、あれには二つ足りないものがあります。一つは言うまでもなく実力。貴方がたならば他愛もなく倒せるでしょうか？」

「違うだね。よくできたガラクタだよ、アレ」

何となく言わんことは理解できた。

大男の形をした念獣は厄介ではあったが対処は難しくない。百体・二百体と居るなら別ににして、増援のない状況なら戦闘の苦手なシャルナークですら一人一殺は確約できるし、数人で班を組んで対処すれば瞬殺すら可能である。また操作系独特の問題ゆえに直接関与できる念は持ってないが、念獣専用の攪乱術でも覚えていたら、同士討ちも可能かもしれない。

要するに中途半端であり切り札には到底成り得ない性能なのだ。

知られても困らないことが連中の基準であるならば、物足りないどころではあるまい。精々が警備兵として使い捨てる駒にするぐらいだ。

「ですので稼働するだけでオーラを食らう念獣を用意してみたのですよ。死後強まる念ならば怨念増殖炉になりそうでしょうか？」

「イカレてるよあんたら。何の為に、何と戦う気だい？」
あの大男でも弱いので他者のオーラを食らって強化する力を与える。

おそらくはセルバンテスの能力でも強化し始めたのだろう。彼方にオーラを感じるのだが……会話を続け、質問を続けるたびにドンドンとオーラが強くなるのを感じた。

凝もそのうち不要になりそうだ。そんな存在を何に使うのだろうか？

「もちろん我らがボス、ビッグファイア様の為に！ 外世界を征服する為のGR計画ですぞ！」

「じーあーる……計画？」

セルバンテスは瀟洒なスーツの腕をまくり上げ、妙に厳めしい腕時計を見せた。

カチリと押せばアンテナが飛び出すギミックは、なんとなく格好良いと思う辺りシャルナークも男の子である。そしてその仕草に自分と通じるモノを感じて嫌な予感がする。

あれは自分と同じ操作系ではないだろうか？

そしてセルバンテスがシャルナークと似たようなことをできるとして、使い捨ての相手や念獣専用の強化能力ドレピンダグがあるのだとしたら？

「さあ来い、GRⅡ！」

「うわっ!？」

ズン、ズン、ズン。

一步一步と踏み出すたびに、溢れるオーラがまき散らされる。きつとまだ未完成なのだろう……垂れ流されるオーラが放出系の攻撃の様にすら感じられてしまう。

そこに現れたのは鋼の巨人だった。

空洞からはオーラが溢れ、試験運用としても3mか4mありそうな巨体を容易く動かしている。

「このデカブツ。フランクリンよりでけーじゃねえか。コイツも奪って帰りやあいいのか？」

「甲冑？ むかし戦争で使ってた大鎧か何かね。クロスクロスの骨が折れそう

よ」

「ちよつと黙つてて。もう少し聞きたいことが……つて。あーもう、色々台無しだよ!」

本命の作戦の為に時間稼ぎしながら、可能な限り情報を奪っておきたかった。

今回はお宝奪つて逃げるのが趣旨になったので、相手の強化と引き換えに情報を聞き出していたのだ。

しかしシャルナークとセルバンテスによる言葉のキャッチボールは中断され、駆け引き無しに戦闘になりそうである。

とはいえここまで来ればすることは一つだ。

「叩け、GRⅡ!」

『マッッ!!』

「速っ……っ?」

さながら水辺のピポポタマスであるかのようにだった。

サイズに合わない身軽な機動と、サイズに見合った膂力と移動力。アツサリと接近されて直撃でもされたのか、誰かが一撃で吹っ飛ばされる。

ピポポタマス……カバの突進の前には獅子や虎が瞬殺されるように、ただの一撃で倒されたのだ。

体は既に停止した車体にめり込み無残な最期を……。

「……クソっが!!」

「あ、生きてる。オメデトー」

「ちゃんと死んでおくね。迷うのよくない」

騙されたならとかく、油断して死ぬ方が悪い。

淡々としていた仲間たちは運の良い仲間の無事を喜んで見せた。

さて、運が良いとかご都合主義はありえない。なにが原因なのだろうかと頭の方はフル回転している。

「咄嗟に『堅』で防御したんだよ! ちゃんと回避もな!」

「籠手、浮遊してるね。きつとそれで間合いを誤魔化したね」

「それよりも伝達速度と判断速度がヤバイね。指示受けてから、ちよつ速^{はや}じゃん」

フエイタンが見抜いたのは、大鎧の腕が射出されたことだ。

間合いが長くなって回避機動を捉えたが、代わりに威力が落ちたのだろう。そしてシャルナークが見抜いたように指示を受けてからの動きも速いが、避けられると判断して射出攻撃への切り替えも異様に速い。

「ですが思ったよりも威力が出てませんね。サイズ不足か、それとも燃料にしているオーラが思ったよりも弱かったのか。まあ貴方がたの売り物です。巡る因果でしようか」

「そいつあどうも。自業自得じゃねえか」

(ということとはコルトピのコピー? ……なら、もしかして)

血反吐を吐きながら立ち上がる仲間を無視し、シャルナークは冷静に思考を巡らせていた。

ワザワザ自分たちを悔しがらせるために、自分たちが売った物を選んだとは思えない。単純に基準値に達する物がなく、売りつけたコピーが当て嵌ったに過ぎない。

「コルトピ。念の為に尋ねるけど、あとどのくらい保つ?」

「あと半日」

「デスヨネー。」

苦笑しながら情報を整理していく。

出力が足りてなのは、死後強まる念ではないからだ。これは良い面。

本来ならば瞬時に食いつぶされるのだろうが、コルトピの能力は一日と期間が決まっている。これが悪い面に当たるだろう。

「十傑衆が二人にバカみたいな性能の念獣か。こりやあ骨が折れるなあ」

「ではどうするかね? 私もそろそろ暇を持って余して来たのだがね」

ニタニタと嘲笑うヒイツツカラルド。

手を出していないなかったのは余裕もあるだろうが、適度なところで絶望を味合わせうつもりだったのだろう。本当にコイツ性格が悪いな。きつと十傑衆の中でも一番の小物に違いないと、心の中で舌を出しておいた。

「そりゃあ盗賊団だからね。お宝奪って逃げるに決まってるさ」
「ハハハ！ それは傑作だ。できるものならばやってみたまえ。ただね……一歩でも動いたら命の保障はしないよ？」

よほど傑作だったのだろう。腹を抱えてねじる様に笑う。

なにせ戦いはゲームのように『お互いのターン』など存在しない。同時進行で思考するし、片方が対策を考えるならば相手もソレを事前に潰せるのだ。

旅団側が何か対策をするとして、ここまで有利なBF団側がソレを見逃すだろうか？

否！ 何もできないように次々に攻撃を撃ちつつ、新たな奇策ごと叩き潰せる実力と経験を持っているに違いない。

まさに窮地、まさにピンチ。

千日手ですら命を長らえさせるに過ぎない！ このままではこの場に居る『八名』全員が殺されてしまうだろう。

「じゃあ、少しだけ悪足掻きをしちゃおうかな」

そんな時、シャルナークは不敵に笑って携帯電話に向かって呟いた。

彼が念能力を使うためには、そんなことをしたらいけないのに。

否、否否否！！

発を使って他人を操るのが難しいと決まった時点で、彼は最初からここには居ない仲間へ連絡を送っていたのである！

ゆえに一言、こう叫ぶだけでいい！

「叩け、ウヴオー！ ビックバン・インパクト！」

『う、おおお、おおおおお！！』

先ほどのセルバンテスの真似をして見せた。

その瞬間に断崖絶壁が『足元から』不自然に盛り上がる！！

猛烈なオーラが弾け一同が戦っていた戦場を吹き飛ばしたのであった！！

●次回『世界を導く北辰 全てはビックファイアのために』

断崖絶壁での死闘は、最初から旅団の仕掛けた罠だった。

崩れ行く大地に紛れ、BF団と幻影旅団は殺意と狂気を交わし合

う。

『求め続ける事にこそ価値がある』

世界を導く北辰、全てはビッグファイアのために

●逆転、あるいは……

ビッグバン・インパクトにより砕け散り、舞い上がる土砂。

その中でアタッシュケースの一部が、ナニカによつて巻き上げられていく。幻影旅団のメンバーも似たような形で地面や岩壁に留まっていた。

「やったか？ この高さから放り上げられたら連中だつて……」

そう言いながらメンバーの一人が腕を回していた。

なに遊んでいるんだとは誰も言わない。それが強化系能力者である彼が持つ、判り易い条件なのだから。

自分達が同じ条件でもなんとかなるだろう。

だからこそ、この場所を万が一の逃走経路にしたし、当然無事だと判断して待ち構えているのだ。

「翔^とべ、GRⅡ！」

「ハッ！ だろうと思つたよ」

あの念獣が浮遊する箆手の力なのか、元に近い位置に浮かんでいく。

そこへ向けて鞭が伸び、セルバンテスが脱出を成功させたようだ。腕を回していた仲間は、先ほど殴り倒された仕返しをしようと獰猛な笑顔を浮かべていた。

ではもう一人は？

そう思つた時、ありえない光景を目の当たりにしてしまった。

「嘘だろ……。あいつ、壁を走つてやがる」

「どんだけー？ てか鹿かよ……」

最初はポンポンと壁を蹴っていたヒイツツカラルドだが、やがて態勢を立て直して壁面を疾走。

それも綺麗な壁などではない。断崖絶壁に相応しいゴツゴツとした岩場の壁を、斜め下に向かって走つていったのだ。

「でも、やっぱり間違いないね。あいつは行動の連続性が……つて、どこに行くのさファイタン!？」

「あいつ笑いやがった……！ ブチ殺すに決まってるだろうが!!」
シャルナークが止めるのも有らばこそ、フェイタンは念で作られた糸から抜け出した。

自身も落下を始めると壁を蹴りながら態勢を整えていく。そして最後の最後で猛烈なオーラを発揮し、ありえない力で壁を抉ると態勢を強制的に整えたのだ。

掴んだ場所から指を離し、油断なく態勢を入れ替えるとそいつが待っていた。

「もしかしてハンターでも目指しているのかね？ 犯罪・ハンターとかバトル・ハンター戦闘の分野で星を得ようとか」

「そんなものはクソ食らえだ。てめえはオレを舐めた。他に理由は要らねえ」

よくハンターでシングルだのダブルだのを能力者の指標にしている者が居る。

しかし、この二人はそんな者には興味はなかった。共に『何がハンターだ、オレの方が強ええ!』と思っており、そもそもラベルに興味などない。

だが我慢ならない物を挙げるとすれば舐められることだ。

ヒイツツカラルドとしては十傑衆を罠にかけ、出し抜いたと思われるたら腹が立つから優雅に降下して見せた。もし誰も追って来なければ、その所作ため込んだオーラで上を真つ二つに切り割いてやるつもりだった。

それはフェイタンも同様だ。

『勝てないから逃げるんだろう?』とか『お前にはできないだろう?』
と言われたような気がして、腹が立ったというだけだ。

「勝てる気で居るのかね? 時間潰しをするよりは、君の仲間を皆殺しにしておきたいのだがね」

「黙れ」

フェイタンはフードに指を掛けると一息に脱ぎ去った。

脱ぎ捨てたフードはバサリではなく、ドサリと鈍い音がした。それほどまでにフードの中には色々と仕込んでいたのだ。

そして軽快なステップでシャドーボクシングを始める。
今から戦うというのにその姿は滑稽。

だがしかし、体の中から滲み出る圧倒的なオーラを抜きにすればの話だ。

拳を振るうだけで天が割れ、舞散る埃がその様子を伝えるほどだ。踏み出せば足元の土砂が吹き飛ぶことで、大地が割れる程の威力を覚えてくれた。

「変化系か。剣なし、お互い素手と言うのも良いね。少しギアを上げていこうか」

「黙れと言ったぞ、三下あ！」

怒りを暴力に変える能力、これこそがフェイタンひとつ目の発。

フェイントを多用し隙を突くトリックキーな軽戦士。その暗殺者めいた外面は偽りであり彼の本質は狂戦士だった。軽装のはずの一撃が、怒り共に爆発的な火力を持つのだ。

「ククク。十傑衆を三下呼ばわりとは。Aランク以上の能力者だと分類でもしてあげようか？ お嬢ちゃん」

(っ腕を隠して……。クソが！ どっちだ!?)

挑発に対して挑発返し。

そしてヒイツツカラルドは両手を背中で組んだ。

腕を隠すことということはフェイントか？

フェイタンは左右を判断するのではなく、自ら動くことでその選択肢を除外した。

残像すら生じる高速で相手の右から迫り、腕を狙った一撃。

防がねば肋骨を粉碎するコースを選び、自身の目は奴の左側を凝視しておく。

それに対して繰り出されたのは右肘。

最低限の動きで攻撃を留め、ゆっくりと左手を突き出したのである。ピットという軽い音に対しても油断せず、咄嗟に回避したのだが……。

「ぐう……？ 馬鹿な。回避したはず」

「覚えておくと良い。同じ技だけれど、同じ撃ち方だと思うからそう

なる。初速と弾着が違うんだ……このくらいね」

気が付けばフェイタンの脇腹が斬られていた。

ヒイツツカラルドが親指と人差し指を軽く広げて、僅かな差だと説明していた。どうやら速度特化の撃ち方らしいが、拳銃クイックの早撃ちドロウころの速度ではなかった。

「クソが。本気になりやがったってことか」

「ギアを上げていくと行ったろう？ 私が敵を前に慢心する馬鹿だとも思っただのかね？」

念の質そのものは追いつける算段が付いた。

だが戦いはそこからだ。同じ土俵に立つ『敵』ならば、ヒイツツカラルドが手を抜く必要はない。これまでが嬲り殺しにするだけの小物おもしろだと思われていただけの事だ。

「敵か……。敵ならば、殺さなきゃなあ!!」

そういつてフェイタンは笑う。

これほどまでに強い相手が彼を『敵』として認めたからか？

否、フェイタンは別にバトル・ジャンキーの類ではない。

自分の腕前が上がったこと、強さが自覚できたことなどどうでもいい。強敵など難易度の高い障害でしかなく、その克服に喜びなど感じない。

(殺れる。強いだけの相手なら、ぶっ殺してやれる)

旅団の仲間はずきりした奴が多いので普段は合わせている。

だが決してフェイタンはそういう性格をしてはいない。溜め込まないし・後に引きずらないからクールに見えるだけで……彼自身は恨みや怒りに左右される性格をしていた。

「死ね！」

「できもしないことは口にしない方が良いと言わなかったかな？」

先ほどと同じように右側から攻め立てる。

同じように肘でブロックされるが、オーラを瞬間的に爆発させて威力を底上げた。無手で戦うのは、オーラの攻防移動よりも速い火力上昇にあった。こうなればもはや剣など重りに過ぎない。

剣よりも強力な肘打ちが、奴の肘骨を砕きに掛かる！

例えそれを受け止めたとしても、もう片方の手で殴り倒してしまえば良い！ 彼の発は怒りを筋力や脚力に変えることで、パワーとスピードを両立させていた。

「さっきの焼き直しと思っただか！ 死いい……」

「考えることはお互い様だ。もう一枚くらい手を加えたまえよ」
肘を起点に動こうとしたところまでは同じ。

素早いオーラの移動でヒイツツカラルドへのダメージは軽減され、驚くべきことに掌底がフェイタンの手の平にぶつかって小気味よい音を立てる。

憎らしい敵との間に強制ハイタッチ。

吐き気を催す気色悪さだが、それは決して気分の問題だけではないだろう。走り抜ける衝撃波がフェイタンの体を揺さぶった。おかげでこちらの追撃はカスただけで大してダメージを与えられていない。

「惜しいね。君が女の子だったらとくに口説いているんだが」

「ぬかせ。その時はひんむいて布団の中だろうがこのゲス野郎！」

べつと血を吐き出しながら正面から拳を連続で叩き込む。

それも左右に分身とおもえるようなステップを残し、方向性を誤魔化しながら攻め立てた。もつとも踏み込んだに一撃にオーラをたらふく載せていく。

腕だけでは止められないと見たのか、肘と膝を組み合わせたブロックで止められてしまう。上乘せしたはずの火力に匹敵するほどのオーラが瞬時に生成（精製）されている。

「そろそろ終わりにしようか。上の連中も始末したいからね」

ヒイツツカラルドの方は血を吐き出すのではなく、優美にハンカチで口元を拭っている。

強い。今の段階で奴が強いのは仕方ない。念の強さは追いついても、使い方や戦闘経験までは追いつけてないからだ。

だが、倒せないわけではない。

念能力者の戦いにおいて、重要なのは強さではないのだから。

「……ふん。ご自慢の念獣を潰されて焦ってるんじゃないのか？」

バラバラと籠手や鎧に使っている素材が落ちて来た。

おそらくは旅団の誰かがセルバンテスを倒したか、念獣だけでも破壊したのだろう。

「焦る？ 私か？ 試作品に過ぎないGRⅡを潰された程度で？」

……ふ、は、ハハハハ!! ああ実に面白い冗談だ」

傑作だとはかりにヒイツツカラルドは大笑いした。

これだけ実力差を見せつけられて、大した強がりだと下卑た笑顔を浮かべる。

それはやがてサデイスティクな笑顔に変わり、鳥が翼を広げるように両手を見せつける。あるいは指揮者が音楽を奏できるように楽団へ指示を出すかのようなのだ。

「別にGRⅡが壊されようが、セルバンテスが死のうが構わないよ。我らが全てはビッグファイアの為にある」

「馬鹿みてえなもんをありがたがりやがって。面^{つら}拝む前に死にな！」

あえて挑発しながらフェイタンは突っ込んだ。

手は拳として固めているが、中指を立てていてもおかしくない。それに対してヒイツツカラルドの動きは優美で、そして最低限の動きだった。

スローモーにすら感じる動きで、両手の指がパチン・パチンと甲高い音を立てる。

緩やかな動きゆえに、指先の差が明確に判るのが不気味だ。

右手はよくあるフィンガースナップだが、左手は少し違う。弾指と呼ばれる所作で音を立てたのである。違う鳴らし方なのに同じ音を出しているのが小気味よい。

右からは凄まじい切れ味の真空波が発生し、左からは僅かに遅れていながら右を凌駕する速度で放たれている。袈裟懸けに切り裂く一撃に、逆袈裟の一撃が追い付いて軌道を大きく変えた。それも……フェイタンが回避した方向にである！

「……右手っ！」

「おつ。咄嗟に首は庇ったのか。少々大人げなかったかな？ まあ、これにて閉幕と……？」

膨大なオーラを集中させた右手でフェイタンは真空波を殴りつけた。

それなのに相殺どころか、首を守るので精一杯。右手は切り落とされ掛けブランと垂れ下がり、体の方もボロボロであった。だからこそ……。

だからこそ、それがヒイツツカラルドの『敗因』となったのである。

血だまりのなかでフェイタンは顔をあげて、こう呟いた。

「許されざる者……はげ山の一夜」
ペインバツカール
ブラッドラスト

流れ出た血が針となって射出され、刺さった場所から流れ出る血がさらに針となって周囲を覆う。憎しみが憎しみを呼び、谷底どころか断崖の淵まで覆うほど、無数の針が居る者全てを傷つけた……。

●北辰は今、ここに輝きたり

その様子を彼方から見つめる複数の影があった。

一つは撤退したセルバンテス。そして協力して念獣を作り上げた能力者たちである。

「あれで良かったのですか？」

「GRⅡだけではなくヒイツツカラルド様まで……」

「構いません。外世界、真実、力。求め続ける事にこそ価値がある」
能力者たちが驚くのも当然だろう。

作り上げた念獣が破れたのみならず、無敵を誇った十傑衆までもが！

「全てはシナリオ通り。問題ありませんともそう……すべては」

「全てが我らがビッグファイアの為に！」

セルバンテス……いや、この場ではミスター陳というべきか。

アタツシユケースの中から緋の眼を取り出し、眩しそうに眺める。

「データは？」

「順調です。イレギュラーはありましたが、奴らからも観測できました」

「特定ベクトルに向けた精神力の深度が計測できました」

『万能執事』ミスター陳としての彼は計画遂行のために行動していた。

「よろしい。これでG R計画は第二段階を越えました」

「おめでとうございます！　これでB F団の戦力にも磨きが……？」

陳は戦力と言葉を聞いて、僅かに首を傾げた。

どうしてそのような愚かなことを言うのだろうと思い、真意を告げていなかった事を思い出す。

「ああ。戦力などどうでもよろしい。G R計画の初期段階は外来種の精神的・肉体的な汚染から我々をブロックするための物。その為の精神ベクトル、そのための精神深度。そのための死後強まる念なのです」

あまり知られていないが、過去人類は外の世界に赴いたことがある。

手痛い敗北を喫したどころか、そもそも戦いにすらなっていないのだ。ある物は戦いに敗れたが、ある者は汚染される仲間たちを見て心が折れた。同士討ちなど実に可愛らしいものである。

中には外世界の道に触れ、強化した者も居るがモノに成り果てた。

だがG R計画が着実に進行することで、その心配がなくなるのだ！

「いつやってくるとも知れない外来種に、怯えることない夜を。」

やがて赴く新世界へ希望を抱いで眠れる、美しい夜を！

それは幻ではない！　全ては我らがビッグファイアの為に！」

大団円―満ち足りしは、幻の蜘蛛

流れ出る血潮とオーラが無数の針となって射出される。

針による殺戮の宴。もはやここが断崖絶壁の峡谷だったとは思えない。

「……いた。居やがった。……生きていやがった!!」

フエイタンが憤怒の表情を浮かべたのは一瞬。

一転してウツトリとした笑顔に切り替わった。

「ククク。アハハハあ……ああアア〜。十傑衆ともあろうものが情けない姿ね」

捕虜にして連れ帰り、秘密を洗いざらい吐かせれば多大な利益になる。

旅団にとつてもそうだし、フエイタンは仲間から一目置かれるようになるだろう。自分たちをたった一人で蹂躪したヒイツツカラルドを仕留めたという事は、それだけの功績なのだ。

だがしかし、そんなことを考えたのは僅かな間でしかない。彼の理性は蒸発し、かつてないほどの欲求が鼓動と彼自身をエレクトさせる。

年頃の少女が抱く恋心の様にドキドキと。

その辺りに落ちていたガラスの破片を握り締め、ヒイツツカラルドの腹に突き刺した!

「グウ……。おの……。れ……。」

「生き恥を晒したくないだろう? 助けてあげるね」

フエイタンの早鐘の様に打つ心臓はまるで乙女の様ではないか。

ズブリと肉を割く手応えに自然と笑みが零れてくる。後ちよつと、後ちよつとくらい突き刺しても死なないだろう。もう少しくらいは深く突き刺しても構わないか?

耳元で舌なめずりしそうな程に息を荒げ、興奮し、ガラスの破片を強く握り過ぎてヒイツツカラルドのものか自分の血なのかすら分からないほど滲んでいた。

ああ、いけないいけない。

このままでは簡単に殺してしまう。もつと屈辱を味合わせなければ。

虫けらの様に追い回されたのは屈辱の極みだった。それが勝利によつて逆転する。この時の為だったと思えば全てが許せる。楽しい、うれしい、たまらなくタノシイ。

「誰かに獲物盗られない内に済ませてしまいう良いね。ああ、でも、もし生きてたら情報もらうよ」

普段のフェイタンは好悪の感情を我慢しない。

その場で垂れ流すし誰とでもサツパリした付き合いをする。信用できないと口にし嫌いだと口にし、腕前を見ればそれなりの評価をする。昨日まで殺し合った連中と酒を飲み、昨日までの知り合いと簡単に殺し合える。入れ替わった新人に遠慮ない口出しするのも平気でやっている。

だから彼は憎しみも恨みも持続させない。

ヒイツカラルドに対する恨みはここで思う存分済ませてしまおう。思い切りズブリとやって死んだらそれまで。生きていたら仲間への元を持ち返って情報を洗いざらい抜き出せばよい。そう思つて一気にガラス片を突き出した。

「直ぐに殺してくれ言うようになるね。ワタシこれでも凌遅刑、得意中のとく……」

肉が割ける感触や苦悶の声を聴くのは何より楽しい。

どうやら咄嗟に防御したので死んでないようだが、ここで切り刻めば死ぬだろう。そう考え思い切り腹を抉っていくと、途中で軽い手応えがした。

そしてフェイタンは奇妙なモノを見つけたのである。

やがて細い糸が谷底へ降りてくる、無数の針が突き立つ中に三人ほど。

見渡すところ針ばかりで、かつて生物だったモノはみな貫かれて針山と化している。

「針による絨毯……まさしく絨毯爆撃つてやつですな」

「シズクって意外とオヤジギャグ好きだよな」

「つまらねー冗談言ってるじゃねえよ。邪魔つけな針をどうにかしな」

シズク・ムラサキは無表情のまま掃除機を出現させた。

そして『血や体液で作られた針を吸って』と口にした途端、目の前にある針山が消滅したのだ。そこには元の峡谷と列車であった物の一部が転がっている。

「フェイタンのやつ生きてんのか？」

「どうだろうね。今回戦ったヒイツカラルドと『ペインパッカー』の相性は良いから、勝ったとは思うけど相打ちの可能性はゼロじゃないと思うよ」

刀使いの質問にシャルナークは曖昧な言葉で返した。

ペインパッカーは大規模カウンター能力だ。サデイストラしきヒイツカラルドがフェイタンを追い詰めれば追い詰める程に大ダメージを発生させるが、それは仲間の生存に直結しない。

「誰がそんなマヌケか。生きてるね」

「おっ。無事だった」

「ズタボロじゃねえか。上にみんな居るから、さっさと縫ってもらいな」

やって来るフェイタンは足を引きずり、千切れかけた片腕を縛って止血していた。

体中に切り傷があるが、オーラで防御してなお相当に攻撃を食らっていたのだろう。顔色も悪く今にも倒れそうだ。

「そうさせてもらうね。あとコレ、ヨロシク」

「戦利品か？」

「ていうか人だよな。……誰？」

フェイタンが無事な方の腕で抱えていたナニカを転がした。

縄代わりにカーテンか何かで縛られているが、そいつは見たこともない男だ。

頭部がスキンヘッドの黒人だが……。

何より奇妙なのは体のあちこちに穴を空けている事だ。それも昨

日・今日になつて空けたものではなく、当然ながらフェイタンの放つた針で傷ついたものではない。

「戦利品と言えば戦利品ね。良く判らないから団長に考えてもらうがいいね」

なんにでもイラつく代わりに後に感情を引きずらないフェイタンが、珍しくブスつとした表情を見せている。

戦いに勝利したはずなのに、まるで勝ち逃げでもされたかのようだ。もつともヒイツツカラルドが生きているのならば、もつと悔しそうな顔をしているか、さもなければ警戒しているだろうが。

「なんだ？ どういうことかサツパリ判らねえ。おいフェイタン、ちったあ説明をだな……」

「あ、この人生きてますね」

「聞こえる？ 君つて誰だい？ 何をしてたの？」

何も答えないフェイタンに刀使いが問い詰めるがまるで反応がない。

代わりに簀巻きにされた黒人男にシズクとシャルナークが反応を示した。こうなれば刀使いの方も仕方なく、男を担いで二人の方へ顔を向けてやる。

「お、おれ、オレはボノ……レノフ。世界で……もつとも、美しくたた……かう一族……。おれが、オレこそが……」

その名前は聞いたことのない名前であり、知らない顔に対して謎は深まるばかりだった。

一体、この谷底で何が起きたのだろうか？

●その名は……

薄暗い部屋の中で本が開かれる。

黒い豹の描かれたページに指を挟み、オーラを流し込むとグニヤリと絵が動き出した。そいつは地面に降り立った後で、ドロドロと粘液状に形を変えて倒れている男を後ろ手に拘束する。

そのまま部屋の天井に吊り下げれば踏みしめる大地もなく何もできなくなるだろう。

消費オーラも少ないので長時間拘束にはピッタリの能力なのだが、

捕縛目的の能力ゆえ強制的に眠らせるしまうために尋問できないのが残念なところだ。

「十傑衆。倒したと思たらコイツになたね」

「本当かよ？ 身長とかはともかく肌の色とか全然違うじゃねえか」

謎の男を連れ帰ったフェイタンの言葉に仲間たちは疑問の声を上げる。

とはいえ戦利品の質を高めるために、抗議をしているわけではない。謎を解くために現実に起こったことを淡々と告げているだけだ。

「……だ、そうだが。シャル、お前の見解は？」

「うーんそうだねえ。まずコイツはヒイツツカラルドの部下で、お互いの位置を入れ替えたとか、姿ごと能力を借り受けた。……つてのが考えられるかな」

転移能力は極めて希少だが、狙って取得できない訳でもない。

強力な放出系が前提になるが、キーがヒイツツカラルドならば十分だ。その上で重要な部下を犠牲にすることを前提に、もう幾つか条件を付ければ可能だろう。

もう少し簡単な方法は、外見と能力をレンタルすることだ。

旅団の長であるクロロがそういった能力を持っている。例えば今使っている粘液に変化する黒豹は、その能力で取得したものだ。転移に関する仮定と同じように難しい条件を付ければ可能と思われた。

「だがお前は違うと考えている。事態はもう少し深刻だど？」

「うん。だってそこまで大きなきことをして、目標が『死後の念』を持つアイテムだなんて釣り合わないよ。仮に団長がその能力を奪ったとしても、オレ達の誰かを犠牲にしてウヴオーやフランクリンを呼ぶとかありえないでしょ？」

復讐だとかメンツが関係すれば別なのだろうが、普通はコストというものを考える。

倒されなければ犠牲は出ないにしても、他にも幾つかの条件はあるだろう。大したことのない獲物の為に犠牲を考慮しては割りに合わないのだ。

「団長やパクを守る為なら許容範囲だが、俺らじゃあ割りに合わんな」

「そういうこと。もう大前提がおかしくなっちゃうんだよ。もつと大掛かりな目標の一環だとか、コイツもまたG R計画とやらの実験ならまだ判るけどね」

もちろんククロ口を始めとするレアな能力者を守る為なら仕方ないという場合もあるだろう。

しかしヒイツツカラルドに相当する旅団メンバーはフランクリン辺りになる。鉄砲玉を守るのに鉄砲玉を犠牲にしていたのでは、作戦にしても組織運営にしても成り立つはずがない。

「実験。実験ねえ……何をやってんだか」

「むう。どういう事だか、まったく判らねえぞ」

「念獣の話じゃ外世界に進出する為とか言ってた気もするけど、コイツと何か関係してるのか今のところ判らないね」

結局のところ情報が少な過ぎる。

そう結論付けようとしたところで、クスクスと笑い声が出た。

一同が顔を向けるとそこにはメンバーの一人、ピエロにも似た男が座っている。

「本当に気が付かないのかな？ ヒントはとっくに出てると思うんだけどね◆」

「あん？ んなの何処にあったよ」

「判たならさささと言うね。コイツの代わりに痛い目あいたいか」

ピエロの言葉にイラツと来て答えを強要するが、どうしようかなくとはぐらかす。

答える気がないのであれば最初から口にすまい。からかっているだけなのだろう。

「彼らが自分たちで言ってるじゃない。ビッグファイアの為♥だってさ。本物が居るなら偽物で我慢する必要なんかないよね♠」

ピエロは最初に自分たちを指さし、次に団長であるククロ口を指さした。

先ほどの例とちょうど逆だ。

鉄砲玉どころではなく限りなくレアな能力者が十全に動けるための手段であれば、その辺りの能力者を犠牲にしても問題はない。負け

なければ死なないのであれば言う事もないだろう。

「奴らの首領をか!? そりゃあどうせコピーするなら強い方だが……」

「いや。ヒソカの言う事も判る。盲点だったな……確かに連中の頭は目撃例がない」

ピエロ……ヒソカと呼ばれた男の言葉をクロロが認めた。

最初は半信半疑だったメンバーも、団長のいう事ならばと荒げた声を潜める。それにBF団の首領が目撃されていないのであれば、考え得る状況が幾つかあるのだ。

「十傑衆ほどアクの強い連中が首領が不調なのに従うはずがないと思っていた。だが本当に不調で動けないのに、それでもなお従わざるを得ないほどの実力者であるとしたら?」

重傷であるとか、昏睡状態であるとか。

もしそんな理由で動けないが、凄まじい特殊能力があるならばどうだろう? BF団の首領ビッグファイアが自由に動くことが目的になっても何の不思議もないだろう。

「それってハンター協会のネテロ会長とか、ゾディアック家の長老とかクラス。最悪それ以上ってことだよ?」

「だからじゃない? その二人って確かに外世界に行っただって話だよね」

「詳しいじゃねえか」

例に挙げられた人物は念能力者の中で金字塔と言える人物だ。

半ば伝説と化しているが、もしそんな人物級ならどうだろうか。それ以上の強さ……はありえないにしても、そのクラスの能力者でレアな特質系ならば辻褄が合う。

そして、その人物が外世界に行っただけがあるとしたら意味が通る話も出てきてしまう。

最初に出て来たバランスという念獣は量産タイプとしては高性能なのに強さが足りない。その後に出て来たGR-IIでもまだまだ。と言っていた。

果たして、どの基準は何処からきたのか? 実際に戦ったからだ。

そして、コントロール奪取の警戒も含めて『死後の念』を求める理由が判るのだ。何しろ外世界に行った連中は、同士討ちや洗脳を含めてアツサリ全滅したとのことである。

「……シズク。体内にある薬品を指定して抜き出せるか？ 複数ある内の一つをだ」

「どんな薬なのかさえ判れば可能ですよ。一番新しいとか、一番最初に使われたとかでもいいですけど」

クロロは何事かを悟ると、これまでにない難しい顔をしてシズクに尋ねた。

キョトンとした顔で返す彼女の言葉を、クロロはずっと吟味している。

「その昔、V5に連なるお抱えの研究所で噂になったことがある。外世界から持ち返った標本の第一級資料。そこから取り出した成果物の第一とでも言うべき貴重な薬品があると」

「まさか団長!？」

「知ってるのかシヤル？」

クロロとシヤルナークは顔を見合わせ、仲間たちは邪魔をしないように黙った。

その様子を楽しそうにヒソカは眺め、どんな楽しい話になるのかと興味を示している。

「普通、研究素材とか成果物の番号って発見順なんだよ。でも、ソレに関して是有用過ぎて機密指定の順番が入れ替わってる」

「そうだ。指定番号1の1。世界最重要機密……その名は超人薬ワシ・ゼロワン」

V5が所有する標本とは外世界の汚染に耐えきった被験者。

その成果物とは汚染を再利用して作られた、誰もが超人に成れる薬であるという！

そしてボノレノフと呼ばれた黒人より、名前指定で吸い出されたことでその薬の存在が確定された。

「奴らの首領は世界政府に捕まってるってことか？」

「決まったな。連中が奪い返しに行くなら横からかつさらっちゃう

ぜ」

「推論だから本当かどうかも判らないけどね。まあ今は情報待ちかな」

こうして幻影旅団の目的に一つの遊びが加わった。

B F団とV5の抗争に首を突っ込み、奪えるモノを奪うという事だ。

そこに同情などなく、あえていうならば自分たちに喧嘩を打ってきたB F団に逆襲してやろうというくらいだ。

彼らの行く末がどうなるかは分からない。

だが世界が続く以上は物語もまた進んでいく。

機会があれば『白昼の残月』そして『ドミノ作戦』について語られることもあるだろう。

今は幻影旅団がお宝を奪い、見事にB F団の目的を見抜いたことで大団円としよう。